



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4519号 2018.7.31 発行

相模原殺傷事件2年 障害者の権利守る大切さを歌に 毎日新聞 2018年7月31日



障害者施設利用者の前で完成した「みんな大事な仲間たち」を歌う歌手のS I Oさん=東京都日野市で2018年6月27日午後2時23分、蒔田備憲撮影

障害者施設で起こる差別や虐待事件をなくそうと、東京都日野市の社会福祉法人が、障害者の尊厳や自立の大切さを伝える愛唱歌「みんな大事な仲間たち」を作った。2年前に起きた相模原市の障害者施設殺傷事件を受けて制作した。関係者は「障害者の権利を守る支援の一助にしてほしい」としている。

制作を企画したのは、障害者施設を運営する社会福祉法人「夢ふうせん」の湯口裕理理事長。2016年7月、相模原市の知的障害者福祉施設で元施設職員の男が19人を刺殺するという事件に衝撃を受けた。「施設職員であっても障害者の権利、尊厳を守る大切さを理解しているとは限らない」と危機感を抱いたという。

同法人の運営する施設を含め多くの施設は、支援のあり方を定めた「運営方針」や「理念」を掲げるが「施設に張り出したりホームページに掲載したりするだけでは、職員の血や肉になっていない」と感じた。そんな時、明るい社歌を歌う企業を紹介するテレビ番組を見て「歌なら、職員も利用者も楽しみながら大切な理念を心に落とし込めるのではないか」と考えた。

作詞にあたって、全国の約20カ所の障害者施設の運営方針や理念をホームページなどで調べ、「社会参加」「自立」など共通する用語を抽出。日常会話で使うような分かりやすい「みんな一緒に」「自分の力で」といった言葉に置き換えた。

作曲と歌は、日野市出身の男性歌手、S I Oさん(49)が担当した。S I Oさん自身もボランティアで障害者支援に携わった経験がある。親しみやすい曲調を意識し「自分が今まで出会った障害者の姿を思い浮かべ、社会参加や交流が深まってほしい」との願いを込めた。

6月27日には「夢ふうせん」の施設で完成した曲を披露。利用者や職員約110人が声を合わせて歌った。施設を利用する門脇拓さん(26)は「歌を通じて障害者を理解してくれたら、相模原のような事件は起きないと思う」と語った。

「みんな大事な仲間たち」のCDは1000枚制作し、希望者に無料で配布する。問い合わせは夢ふうせん(042・587・8630)。【蒔田備憲】

歌詞「みんな大事な仲間たち」

生きる喜び 働く喜び
 みんなで一緒に工夫して
 胸に希望と勇気をもって
 自分の力で生きてゆく
 そこにあなたの手がひとつ重なれば

ぼくらの居場所（夢ふうせん）

ぼくらの夢はここにある

わたしの居場所（夢ふうせん）

みんな大事なずっと大事な仲間たち

※1番の歌詞を抜粋。かつこ内は、各施設の名称に合わせて変えることができる

定着するまで見守って 県内での障害者の就職

中日新聞 2018年7月31日

企業担当者（右奥）の説明を聞く参加者＝関市内で



労働力不足の打開策の一つとして、障害者雇用に注目が集まっている。国は、この春から企業に課す障害者の雇用率を2%から2・2%に引き上げ、新たに精神障害者も対象に加えた。ただ、就職先の環境が合わず、定着できない場合も。障害者の社会参加を進めるためにも、個々の特性に合わせたマッチングが求められる。

七月中旬、県内の五圏域で県が一回ずつ開く、障害者と企業の就労相談会が関市内であった。知的

的や身体に障害のある人が、福祉事業所の職員と、製造業など七社のブースを回った。

「送迎はありますか」「作業は何人でやりますか」と、矢継ぎ早に質問する参加者。自分の障害の程度と仕事の適性を念入りに押し量っているように見えた。知的障害のある五島慎さん（23）＝関市＝は、サービス業を志望。「製造業で働いたが、なかなか続かない。細かい作業が得意なので別の形で生かしたい」と力を込めた。

出展した貴金属リサイクル業の松田産業関工場（関市）は、二年前から障害者を雇い、現在は七人がパソコンなどの解体作業をしている。駅から送迎バスを用意するなど、通勤に配慮。小泉英司工場長（40）は「感性が豊かで、私たちの目が届かないところにも気付けてくれる」と期待する。

岐阜労働局によると、昨年六月現在、県内企業で働く障害者は過去最多の五千七百三十三人。実雇用率は2・02%で、全国平均の1・97%を上回る。特に精神障害者は伸びが大きいものの、短期間で転職を繰り返す人も少なくない。

県は本年度中に、各圏域の障害者就業・生活支援センターに、精神保健福祉士を一人ずつ配置する方針。二〇年春には、職業訓練と就労、定着支援を一括で担う「県障がい者総合就労支援センター（仮称）」の開所も予定する。

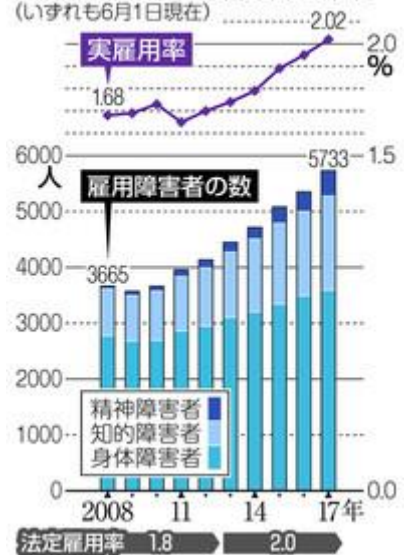
「福祉支援と就労支援では、ノウハウが異なる。形だけでなく、明確な目標を立て、成果を示さないと意味がない」。そう指摘するのは、障害者の就労訓練をする「ノックス岐阜」（岐阜市）の後藤千絵代表（39）。同社では、採用前に企業で実習してもらうほか、就職後も職員が職場訪問や電話相談で、定着を支える。

県労働雇用課の担当者は、「精神障害者の支援は始まったばかりで手探りの部分がある。定着状況を評価できる仕組みも必要」と話す。就労後の歩みまで見守る姿勢があつてこそ、実効性のある支援につながっていく。

◆声掛け合える環境を 発達障害の青山さん

発達障害のある青山高幸さん（26）＝岐阜市＝は、企業への就職を目指し、六月から

県内企業で働く障害者の推移



ノックス岐阜に通う。障害者が飛び込みやすい職場づくりについて聞いた。

－苦手な作業は。

人の顔が認識しづらく、耳も聞こえにくい。頭でイメージしたことと手先の動きがずれるので、人のまねができない。大学の時、発達障害と診断されたが、生物学にのめり込み、大学院修士課程まで修了した。

－なぜ一般企業を目指すのか。

卒業後は約九カ月、(重度の障害者が雇用契約を結ばずに工賃を得て働く) B型事業所で働いた。安定した収入を得て、好きな生き物を趣味で楽しむ生活の基盤をつくりたくて、ここに来た。たくさんの業種や職種を知り、自分に合う仕事を探している。

－障害者が働きやすい職場とは。

得手、不得手は誰にでもある。雇用する側には、私たちをただ障害者として見るのではなく、常に声を掛け合える環境にしてほしい。雇用される障害者も、自分の特性を理解し、伝えなければならない。そのために、支援する人は、私たちが何に向いていて、今どんな力が足りないのかを一緒に探り、示してほしい。(兼村優希)

A型事業所解雇問題で意見聞いて 岡山で2日、利用者14人が発表



山陽新聞 2018年7月31日
フェスのリハーサルを行うありがとうファームの利用者

岡山県内で相次いだ就労継続支援A型事業所の閉鎖に伴う障害者の大量解雇問題を受け、岡山市のA型事業所の利用者が8月2日、解雇問題への意見や仕事への意気込みなどを発表する催しをルネスホール(同市北区内山下)で開く。

「パラ・メッセージ・フェス2018」と名付け、A型事業所「ありがとうファーム」(同表町)で働く20～50代の14人が出演。ボランティア

アからも加わって12組に分かれて順番に登壇し、それぞれ7分の持ち時間で、普段の仕事の様子を映像で紹介(1分)▽大量解雇問題を受けて感じていることや伝えたいことを発表(1分)▽歌や朗読など特技や趣味のパフォーマンスを披露(4分)▽仕事や今後の生き方への意気込みなどの表明(1分)－といった流れで進める。

「大量解雇問題が新聞やテレビで報道されたが、働いている障害者の声は世の中に届いていないと感じた」(利用者)として企画した。

午後1時～3時15分。入場無料。定員100人。入場希望者は、同ファームに電話(086-953-4446)かホームページ内にある専用フォームで申し込む。

<ともに>読み書き困難(上) 音読「つかえる」 中日新聞 2018年7月24日



小学6年でデジタル教科書に出合った大谷梨華さんは、今はデジタル図書での読書も楽しんでいる=長野市で

「自分は人と違う」。長野市に住む大谷梨華(りか)さん(16)が、初めてそう意識したのは小学一年生の時だった。

国語の教科書が、すらすら読めない。クラスみんなは、つかえずに読めるので、音読の順番が来ると困っていた。単語としてのまとまりが分からず、一字一字読んでしまうので、声に出すとたどたどしく、文章の意味もつかめない。特に「や」「ゆ」「よ」の違いが分からず、「しゃちょう」と「しゅちょう」などは文字でも音でも区別できない。

九九も「4（し）」と「7（しち）」の音の区別が難しく、うまく覚えられなかった。

周囲が気付いたのは小学四年生の時だった。担任が「授業のペースについていけない」と、特別支援教員の山崎幸子（ゆきこ）さん（53）に相談したのだ。

山崎さんは国語と算数を大谷さんに教えるうち、とつとつとした読み方で、間違いも多いことに気付いた。診断では知能に問題はなかった。学習障害の一つ、「読み書き困難」だった。

だが、周囲はなぜ気付くのに時間がかかったのか。

外見上の特徴もなく、困惑が周囲に分かりにくかったためだ。山崎さんは「音読も二、三度目には読めるのが通例。本人は『読みにくい』と感じても、周りには普通の子と同じに見える」と指摘する。教員の理解も低かった。「離席や大声など問題行動を起こすわけじゃない。でも、静かに困ってるんです」



◆デジタル教科書が転機

大谷さんが六年生に上がって間もなく、転機があった。山崎さんが支援教材「デジタル教科書」を知る。「デイジー教科書」という名で日本障害者リハビリテーション協会（東京都新宿区）が、二〇〇八年に、小中学生向けに無償提供を始めた。個人でも、学校や自治体でも申し込める。

ソフトを入れたタブレット端末などで利用。デジタル化した教科書を映し、音声で読み上げる教材だ。文字の大きさや色、背景の色が選べ、読んでいる部分を色で示せる。

デジタル教科書を初めて手にした日、大谷さんは走って山崎さんに知らせにきた。「読めるよ！ 先生、教科書が読めるよ！」

「世界が変わったみたいだった」。大谷さんは振り返る。文章を読む楽しさを知り、さらに内容が難しい説明文も読みこなし、九九も克服した。

みるみる自信をつけ表情が明るくなった大谷さんの姿を見て、山崎さんは確信した。「デジタル教科書があれば、この子はやっていける」。しかし、中学に進学後、また壁にぶつかる。

読み書き困難という障害がある。認知度が低く、当事者が周囲の理解や協力を得にくい。この障害で学びに苦労してきた高等専修学校一年生（高校一年に相当）の女生徒と、彼女を小学校時代から支える特別支援教員の歩みをたどる。（今川綾音）

<読み書き困難> 学習障害（LD）の一つ。通常の会話や論理的思考に問題はないが、文字の読み書きがうまくできない。脳の情報処理に先天的な問題があるとされ、症状は人によって異なる。文字を音に変換して読んだり、単語のまとまりを理解したりするのを苦にする場合や、文字がぼやけたり、ゆがんだりして見える場合がある。読字障害、難読症、ディスレクシアとも呼ばれる。

<ともに>読み書き困難（中） 認められぬ失意の中で… 中日新聞 2018年7月27日
毎週日曜日、山崎幸子さん（左）の自宅で学校生活の相談や学習をしている大谷梨華さん＝長野市で



周囲が気付きにくい学習障害（LD）の一つ、「読み書き困難」。長野市の高等専修学校一年生（高校一年に相当）、大谷梨華（りか）さん（16）はこの障害に悩みながらも、小学六年でデジタル教科書に出会い、勉強や読書の楽しさを知った。

大谷さんが地元の市立中学校に進んだ年の五月、小学校の特別支援学級の担任だった山崎幸子（ゆき

こ)さん(53)に一本の電話がかかってきた。すがるような声だった。

「先生どうしよう。梨華がだめになっちゃった。全然笑わなくなっちゃった」

母親からだ。中学校にデジタル教科書の使用を認めてもらえず、ふさぎ込んでいるという。山崎さんは耳を疑った。「中学校の先生との支援会議で、デジタル教科書を使うことも説明して引き継いだのに、なぜ」

中学の特別支援学級の担任は、授業での様子から「ちゃんと読めている。デジタル教科書がなくても大丈夫そうだと判断。ソフトの入ったタブレット端末の持ち込みに難色を示した。

大谷さんは担任に何度も説明した。「紙の教科書では文字は追えても内容が頭に入っていない。デジタル教科書の読み上げ音声や読んでいる所を示す表示がある時とは大違いなんです」

しかし何度説明しても、話は平行線。

大谷さんが高校入試で不利にならないよう紙に早く慣れさせたかった可能性はある。一方で「端末を学校に持ち込ませることへの抵抗もあったのでは」と、山崎さんは推測する。

日本障害者リハビリテーション協会参与の西澤達夫さん(64)はこう言う。「デジタル教科書は、視力が低い子にとっての眼鏡のようなもの」。使えれば問題ないのに、使えないと土俵にさえ上がれない。

こうした受け入れる側の事情で一番傷ついたのが、大谷さん本人だ。「使った方が楽なのに。道具があれば、もっとできるのに」。使用が認めてもらえず、日に日に元気がなくなっていく大谷さんをふびんに思い、母親が山崎さんに助けを求めた。

すでに教師一生徒の関係ではない。でも山崎さんは「勉強への意欲が湧いたのに、もったいない」。その日から、二人三脚の学習が始まった。毎週日曜の午前中、大谷さんが山崎さんの自宅を訪ね、約三時間、学校での話や、デジタル教科書を使った勉強や読書をして一緒に過ごす。

山崎さんにとっては、完全なプライベートの支援。「先生の心証は、高校進学時の内申点に影響しかねない」と心配し、「授業」は中学校には内緒だった。

「教科書を読むのがつらかった時期を脱し、ようやく前向きに勉強に取り組めるようになったところ。何とかうまく行ってほしい一心だった」と山崎さんは支援の理由を語る。学習以外にも、学校でのつらさを受け止めてもらうことで、大谷さんは目を追うごとに落ち着いていった。

それでも、大谷さんの中学校に対する失望は消えなかった。再び学ぼうという前向きな気持ちになるのは、ある学校の存在を知ってからだった。(今川綾音)

<ともに>読み書き困難(下) 理解と道具で自信 中日新聞 2018年7月31日



小学校の特別支援学級の授業で、デジタル教科書を使って児童(手前)を教える山崎幸子さん=長野市で

文字の読み書きがうまくできない「読み書き困難」。長野市の高等専修学校一年生(高校一年に相当)、大谷梨華(りか)さん(16)は、この障害に苦しみながらも学び続けてきた。

しかし、学習に必要な「デジタル教科書」の使用を中学校に認めてもらえず、学校で学ぶ気持ちがなえていた。吹っ切れたのは中学三年の夏。小学校から継続して支えてくれた特別支援教員、山崎幸子(ゆきこ)さん(53)の紹介で、豊野高等専修学校(長野市)の存在を知ったからだった。

同校はデジタル教科書を授業で使っていたことがあり、教員の理解も高かった。「ここなら受け入れてもらえる」。進路目標が明確になり、気持ちが切り替わった。大谷さんは今春、同校

に合格。将来の就職を見すえ、パソコンや介護の資格取得を目指している。

大谷さんはしみじみと振り返る。「本当に山崎先生がいてくれてよかった」。教師一生徒の関係ではないが、中学時代に始まった山崎さん宅での個人教授は今も続く。「ずっと見守ってくれたから、ここまで来ることができた」

山崎さんは大谷さんの支援を通じ、継続的な支援の必要性を痛感した。小学、中学、高校と進学する度に、学校に障害を説明し、デジタル教科書などの使用許可を得なければならない。支援者がいなければ本人と家族だけで学校を説得する必要がある。山崎さんは「一貫した支援者が学校との間に入り、スムーズな進学を支えるべきだ」と話す。

山崎さんは現在、長野市内の小学校に勤務。特別支援学級の担任として、児童の指導にデジタル教科書を取り入れているが、普及には壁があると感じている。

デジタル教科書は「視力が低い人にとっての眼鏡」とも評されるが、長野市内でも学校によって対応はまちまち。同じ小学校で特別支援学級の支援員を務める笠原美香さん（45）も「デジタル教科書があれば救える子を救えていない現実がもどかしい」と訴える。

二〇一二年の文部科学省の調査によると、通常学級に在籍する全国の小中学生約二十四万人に「読み書き困難」の可能性があるとされる。デジタル教科書「デージー教科書」を無償で提供している日本障害者リハビリテーション協会によると、全国の利用者はまだ約八千人。読み書き困難児のたった3%にすぎない。

デージー教科書を一括導入する自治体も増え、現在、六十六市町村が利用している。ただ、東北地方では導入例がないなど、地域によって普及に偏りがある。

大谷さんは、ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんの演説になぞらえて、こう話す。「理解してくれる先生と、デージー教科書というツール（道具、手段）が私を変えた。デージー教科書があれば、私は強く生きていける」

山崎さんはここ数年、各地に足を運び、大谷さんら教え子の事例を紹介。障害の周知とデジタル教科書の普及に努める。「『周囲の気づき』『学校の理解』『教材の普及』という、読み書き困難児が直面する壁を壊したい。今もどこかの教室で、静かに困っている子がいるはずだから」（今川綾音）

宮崎) 障害者の絵、バッグやTシャツに 1日から販売 朝日新聞 2018年7月31日



障害者の絵がデザインのもとになったトートバッグとTシャツ=2018年7月、宮崎市

障害者が描いた絵をもとにデザインされたTシャツやバッグが8月1日から空港ビルなどで販売される。

手がけたのは宮崎市霧島



3丁目の制服製作会社「アビックス」。県内アーティストのデザインをプロデュースして商品化する新ブランド「サニービーグッド」の企画第1弾として、自由な発想で絵を描く障害者に白羽の矢を立てた。

描いたのは日向市の障害者支援施設「白浜学園」に通う知的障害者の男女6人。その原画をもとに県内のプロデザイナーが、ファッションデザインに仕上げた。

商品は3種類のTシャツ（税抜き2900円）と8種類のデザインのトートバッグ（税抜き2500円）。売り上げの10%が白浜学園に寄付される。宮崎空港ビル1階（31日

まで)や、宮崎市のボンベルタ橋西館1階の「15 SHOPS MARKET」(9月2日まで)などに並ぶ。

同社の担当者は「個性的で明るく陽気な宮崎らしい絵がデザイナーの手によっておしゃれに仕上がっています。夏休みのおみやげにぜひ」。問い合わせはアビックス(0985・24・2526)へ。(大山稜)

人生変えた手こぎ自転車 埼玉の町工場製作 脳性まひ17歳の通学支え



東京新聞 2018年7月31日

「風を感じて、気持ちいい」とハンドバイクに乗る北川海人さん＝滋賀県日野町で

一人で学校に行きたい。脳性まひで歩行が不自由な少年の願いをかなえた乗り物がある。埼玉県朝霞市の宇賀神(うがじん)溶接工業所が造る手こぎの三輪自転車(ハンドバイク)だ。障害を理由にいじめに遭い、感情を表に出せなかった滋賀県の少年が“相棒”と出会い、自信と明るい性格を取り戻した。(西川正志)

田園風景が広がる滋賀県日野町の農道を、高校三年北川海人(かいと)さん(17)のハンドバイクが軽やかに走る。前輪とつながったハンドルを回して進み、電動アシストのため坂も苦にならない。海人さんは「安定感だけじゃなく、爽快感もすごい」と満足げだ。

脳性まひで常に左足がつま先立ちのような状態となる海人さんは、長時間の歩行が難しく、自転車にも乗れなかった。

転機は中学一年の時。父克美さん＝享年(58)＝が死去し、六キロ離れた学校に車で送迎してくれていた母和代さん(54)の負担を減らそうと、「一人で通学したい」と切り出した。障害者向けの自転車がないか、和代さんがインターネットで探したところ、宇賀神溶接工業所を見つけた。

同社は半世紀にわたり、金属加工を手がけてきた町工場。二〇〇九年、足に障害のある県内の男性の依頼でハンドバイク開発を始め、障害や身長に応じて製作している。「気軽に外へ出かけ、楽しみながら世界を広げる手助けになれば」と宇賀神一弘社長(49)。電動アシスト付きで一台六十八万円以上と価格は安くないが、これまでに二十台のハンドバイクを販売した。

ハンドバイクは寝そべるように乗るレース用や、車いすに前輪を装着するタイプが主流。これらは乗り降りしづらいなど、毎日の通学には向いていない。そこで、宇賀神さんはシートの高さや足置きを調整したフレームを開発した。障害者向けのハンドバイク教室を開くNPO法人「アダプティブワールド」スタッフの斉藤京(みやこ)さん(38)は「宇賀神さんのハンドバイクは主流タイプの弱点を克服している」と太鼓判を押す。

小学生の時は障害を理由に差別され「ネガティブで友達もいなかった」と海人さん。ハンドバイク通学を始めると、同級生らが「かっこいいな」と声をかけてきた。友達も増え、「引っ込み思案だった海人が積極的になった」と和代さん。中学二年で琵琶湖一周に挑み、二日で走破した。

現在、大学受験に向けて勉強しながら、声優になる夢を膨らませている。「昔なら夢をかなえたいとも思わなかった。厳しい世界だろうけど挑戦したい」と前を向く。

「ハンドバイクは人生を変えてくれた」。海人さんの言葉に、宇賀神さんは「これ以上ない褒め言葉」と笑みを浮かべる。

宇賀神溶接工業所は現在、電動アシストのないハンドバイクのみを販売中。問い合わせは同社＝電048(486)2720＝へ。

止めよう「負の回転扉」＝障害者の再犯防止でシンポー冤罪被害の元厚生労働次官村木さん

時事通信 2018年7月31日

冤罪（えんざい）事件による賠償金で基金を立ち上げ、再犯防止活動に尽力する元厚生労働事務次官の村木厚子さん＝6月26日、東京都千代田区

障害者が罪を重ねてしまう「負の回転扉」を止めようと、近くシンポジウムが開催される。郵便不正事件で冤罪（えんざい）被害に遭った元厚生労働事務次官の村木厚子さん（62）が立ち上げた基金の主催。村木さんは「地域社会で障害者の居場所を作ることが大事」と訴えている。

村木さんは2009年、大阪地検特捜部に逮捕、起訴されたが、翌10年9月に無罪が確定。国から賠償金が支払われた。

「捜査を受けたことで刑事司法に関心を持つようになった」と言う村木さん。罪を犯した障害者の多くが再び犯罪を起こす実態を知り、12年、賠償金から弁護士費用などを差し引いた約3300万円を長崎県雲仙市の社会福祉法人「南高愛隣会」に寄付した。

同会は40年以上、障害者の自立支援を続けており、寄付で基金を設立。シンポジウムの開催や研究への助成などに充てている。

8月4日に都内で開かれるシンポジウムでは、再犯防止に力を入れる兵庫県明石市の取り組みも報告される。村木さんは「再犯を防止するためには地域で居場所を見つけられるかが重要で、地方自治体の役割は大きい。担当者はぜひ参加してほしい」と呼び掛けた。

シンポジウムの参加申し込みは31日までで、URLは<http://www.airinkai.or.jp/ainokikin/symposium.html>。



個展 クジャクや地蔵、多彩に ダウン症の居川さん、あすから芦屋で 30歳から描き始め、ぐんぐん成長 /兵庫

毎日新聞 2018年7月31日

個展に向け、新しい「お地蔵さま」の作品を描くいかわあきこさん＝兵庫県芦屋市内の自宅で、生野由佳撮影

お地蔵様やクジャクをカラフルに描くダウン症の画家、いかわあきこさん（48）＝本名・居川晶子＝の個展が8月1日から芦屋市呉川町の木口記念会館で始まる。独特の色彩感覚と世界観で知られる居川さん。「頭や夢の中で考えたことを好きなように描いています。たくさんの人に見てほしい」と話している。【生野由佳】

芦屋市在住の居川さんは、京都市出身で特別支援学校を卒業した。自宅でのんびりと過ごすことが多かったが、30歳の頃、突然、絵の才能が開花した。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行